

DAIWA 「麦わら帽のともだち」

○田舎の川（30年前）

釣りをしているタケシ（10）。  
麦わら帽の少年（10）が現れ、通せんぼする。

少年 「ここから先は、立ち入り禁止だぞ！」  
タケシ 「……俺、釣りしてるだけだから、これ以上奥にはいかねえよ」

少年 「そうか。ならいい。（びくを覗き込んで）ねえねえ、釣れた？」

タケシ 「まあまあ（と中を見せる）小物しかない。」

少年 「全然じゃん！」

タケシ 「（竿を渡して）やる？」

少年 「（目が輝く）」

タケシ 「もう一本あるし」

竿をもう一本見せる。

二人、釣りをして一日を過ごす。

○現代、都会のビル街

ケータイで話すタケシ（40）。

タケシ 「ああ、母さん。今年の盆は帰れるよ。うん。もちろん娘たちも。……あ、なんか父親といるのが恥ずかしいのか、女だけでショッピングモールいきたいって言うてんだ。うん。連れてってくれない？ ……俺？ 釣りでもして時間潰すよ。押し入れの釣り竿、まだあったろ」

電話口の向こうの田舎の母（60）。

母 「あると思うけど……。そういえばいつも『友達に貸す』って、二本持ってたね」

タケシ 「ああ、いたね、あいつ。結局名前も知らなかったけど」

母 「アンタ名前も知らない友達と遊んだの？」

タケシ 「男同士なんてそんなもんでしょ。あ、

だんだん思い出してきたぞ。あいつ、いつも麦わら帽子被って、赤いランニングと赤いサンダルで……」

母 「……」

タケシ 「どうしたの母さん」

母 「……まさかね」

タケシ 「なに？」

母 「田中さんとこの息子さん、よくそういう格好しててね。でもあなたが生まれるずっと前の日に……」

インサート。

川に浮かぶ麦わら帽。

タケシ 「何言ってるの？ ……まさか」

母 「ねえ。そんなわけないわよねえ」

回想、通せんぼをする少年。

少年 「ここから先は、立ち入り禁止だぞ！」

タケシ 「あいつ……危険を知らせてくれたたのか……？」

○田舎の川、現在

最新の竿とウェアのいで立ちで来た、

(大人の)タケシ。

あの時とそっくりの少年が通せんぼする。

少年 「ここから先は、立ち入り禁止だぞ！」

タケシ 「……(笑って)俺、釣りしにきただけだから、これ以上奥には行かないよ」

竿を見せる。

少年 「そうか。ならいいんだ」

タケシ 「……」

少年 「(びくを覗き込んで)ねえねえ、釣れた？」

タケシ 「まだだよ。今来たところだし」

少年 「……」

タケシ 「(竿を渡して)やる？ 俺、もう一本持ってきてるし」

少年 「(目が輝く)」

二人、並んで釣りをする。

タケシ「あのさ。……俺のことを覚えてた？」  
少年、釣りに夢中で聞いていなかった。  
少年「え？　なんて？」  
タケシ「……いや、いや。……あ、引いてるぞ！」  
少年「え！　まじで！」  
はしゃぐ二人。  
タケシ「……」

釣り竿があれば、  
ほくらはいつでも友達だ。

DAIWA